

2025年11月29日（土）11月30日（日）
第7回飛騨高山学会

飛騨高山における高齢者福祉に触れた 学生たちのアクションリサーチ

同朋大学 社会福祉学部
准教授 牛田 篤



1. はじめに 1.1

本研究のはじまり

①本研究のはじまり：2025（令和7）年，一般財団法人飛騨高山大学連携センター「福祉分野における移住促進・人材確保に向けた調査研究」の一部に参加した参加学生たちの学びに関する考察を報告する。

本研究にあたり，一般財団法人飛騨高山大学連携センターが公募した「飛騨高山の介護福祉と飛騨高山の魅力を体験」に申込した。参加学生は，高齢者福祉，介護福祉を学ぶ2大学の学生6名と，引率教員1名が参加した。

そして，高山市内の介護事業所2か所に施設見学等を実施し，その学生たちの学びをインタビューしている。

1. はじめに 1.2

②学生たちの背景：2大学の特徴について，A大学では社会福祉学部があり，高齢者福祉，介護福祉福祉を学ぶ環境がある。B大学では，空間作法領域があり，様々な空間デザインを学ぶ環境がある。

2大学では，共創プロジェクト「介護福祉×インテリアデザイン」をテーマとし，学び合う企画に取り組んでいる。そして，高齢者が住み慣れた地域で，本人らしい生活空間，同時にADL（日常生活動作）等が徐々に低下し，その中で在宅生活の継続ができるように，快適な生活環境を家具も含めて検討している。

本研究を開始する時点では，高齢者が老々介護で在宅生活を継続できるように，自宅の写真を撮影し，ご本人たちにヒアリングをしながら，実際に提案する活動をしている。

1. はじめに 1.3

③学生たちの事前学習：「飛騨高山の介護福祉と飛騨高山の魅力を体験」に参加する際、介護保険制度における在宅サービス，地域密着型サービス，施設サービスの違いを当日の引率教員が説明した。

さらに，2か所の見学先を公式ホームページで確認し，サービスの特徴を説明し，地域共生，認知症ケアの原則ともいえるパーソン・センタード・ケアといった考え方，自立支援を促す福祉用具の重要性について基本的な指導を行った。

本研究における事前学習

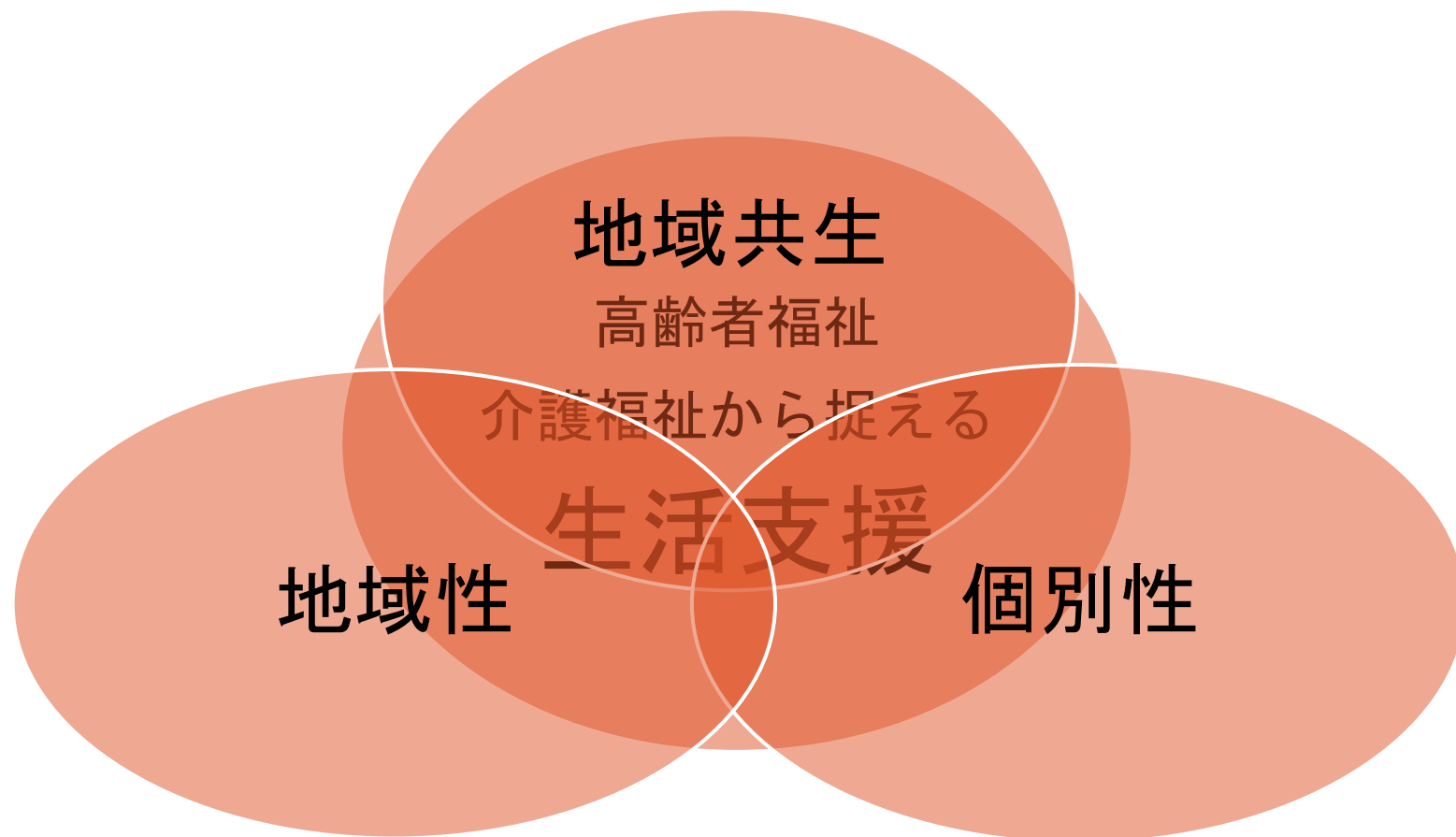


図 高齢者福祉・介護福祉から捉える生活支援，
地域共生，地域性と個別性

トム・キットウッドの認知症に 対する考え方(パーソン・センタード・ケア)

- NI : 神経障害(機能的障害、構造的障害)
- H : 身体健康状態(既往、五感)
- B : 生活歴
- P : 個性、人格(気性、能力、心理的防御性)
- SP: 個人を取り巻く社会的心理背景

5つの要素すべてが認知症高齢者の思考・行動・感情に影響を与えている。
これまで神経障害だけに焦点が当てられ過ぎていたのではないだろうか。

2. 目的

本研究は、高山市における高齢者福祉に触れた学生たちのアクションリサーチとして、地域性・実践性・教育的意義の側面から考察する。

本研究におけるアクションリサーチとは、「現場の声を反映した持続可能な改善」を目指すため、単なる調査ではなく、見学後に地域や介護福祉現場の人々と一緒に変化を起こすプロセスとする。

3. 方法

本研究では、以下の通り実施した。

対象：学生6名。

期間：2025年1月6日～2025年9月30日。

調査手順：①対象者は、前述の通り「飛騨高山の介護福祉と飛騨高山の魅力を体験」の事前学習を行う。

②2025（令和7）年2月10（月）から11日（火）「飛騨高山の介護福祉と飛騨高山の魅力を体験」に1泊2日参加し、2か所の見学先で、管理者などから高山市内の具体的な介護福祉実践について学ぶ。

③対象者に対して、体験後にインタビュー調査を行う。

④それらの調査結果について考察する。

分析方法：本調査で得た内容を質的に分析する。

研究倫理

倫理的配慮

本研究は対象者に事前説明を行い，同意を得て実施する。

対象者及び関係者に不利益がないように実施し，体調に応じて途中で中止することも可能である。対象者は特定されない。

4. 結果 4.1

本調査から、参加した学生からは、好意的な回答を得た。

①地域性について

「雪が降って、すごく寒かったけど、高山市での冬の生活を体験できたと思う」

「見学する際は、緊張したけど、パンフレットを見ながら説明を受けて、より山間部の介護保険サービスを学んでみたい」

「雪がたいへんそうな場所や、高齢化率が高い他のところにも行ってみたい」

「リノベーションした古民家のようなところ（事業所）を見学したい」

「デイサービスには実習に行ったけど、実習先とは異なり、お庭がある環境など、面白かった」という回答を得た。

4. 結果 4.2

②実践性について

「安心して暮らすために、大きな施設で専門職ばかりが関わるのではなく、家のようないくつも小さな環境で、地域で暮らすことが大切だと勉強になりました」

「就職先でも地域性や生活歴を活かした関わりや生活支援をしたい」

「現地に行き見学、体験できてよかったです。卒業後に役立てます」

「居住環境や生活環境が素敵だと、利用者さんが落ち着いて過ごされている」

「家庭的な雰囲気、利用者さんが穏やかな生活をしていることが印象に残った」

「認知症があるのかなって思いながら、リノベーションに関心を持ちました」

「窓の大きさや木造ベースの雰囲気、高齢者の皆さんと職員の方々が一緒にキッチンを使いながら食事の準備や支度する様子を実際に見て、どのように考えればいいのか学ぶ機会になりました」

「家庭、家って感じを大切にしたい」といった回答を得た。¹¹

4. 結果 4.3

③教育的意義について

「高齢者施設や高齢者事業所のインテリアデザインをもっと学びたい」

「次の機会があれば，旅行も兼ねて，高齢者の皆さんにまた会いたい」

「予定が合えば，もっと見学だけでなく，自分たちの学びを活かしたい」

「利用者さんと高山に関することや，一人ひとりの生活歴に関するコミュニケーションができるようになりたい」

「ゼミや授業で回想法を勉強し，より地域や生活歴を意識すると，高齢者とのコミュニケーションに役立つのではないかと思った」

「家庭的な雰囲気や窓の大きさ，庭の雰囲気など五感を活かすことが大切だと感じた」という回答を得た。



図 見学先1か所目の説明及び見学



図 見学先2か所目の説明及び見学

5. 考察 5.1

本結果から、学生たちのインタビュー内容を、地域性、実践性、教育的意義から分類した際、全ての側面について、学生たちの感想や気づきとして学びがあったと考える。

「飛騨高山の介護福祉と飛騨高山の魅力を体験」に参加し、2か所の見学を通して、主体的に学生自らの専門分野を活かしたいという意欲が生じる機会に繋がったと考える。

軸足が、介護福祉士、社会福祉士に関する教育を受け、それらの意識がある場合、高山市という地域をフィールドとし、2か所を見学した場合、一人ひとりの利用者とのコミュニケーションや、利用者同士、利用者と職員の生活の様子、生活歴を活かした関わり方、人的側面や人的環境を活かした生活支援への視点が示唆された。

軸足が空間作法という空間デザイン、インテリアデザインに関する教育を受け、それらの意識がある場合、今ある居住環境をどのように工夫し、提案すると、より快適に過ごすことが可能か、日当たり、実際の使い易さ、物的側面や物的環境を活かした生活支援への視点が示唆された。¹⁵

5. 考察 5.2

本研究の取り組みから、地域性、実践性、教育的意義を全て学生たちが主体的に学び、考え、発言するためには、地域共生、地域性と個別性を踏まえた生活支援に関する事前学習が必要であろう。

2大学の異なる専門分野を日々学ぶ学生たちが参加し、専門的な教育を活かし、高山市の福祉について共に学び合う際、互いの関心ある側面や視点から高齢者福祉、介護福祉を捉え、かつ統合することが重要であると考ええる。

本研究から、見学先の環境をより改善し、より専門的な学びを得たいという学生たちの意識や傾向が生じてきたのではないかと考える。前述を可能する環境を各機関と連携し、整えることが今後の課題といえよう。

6. 結論

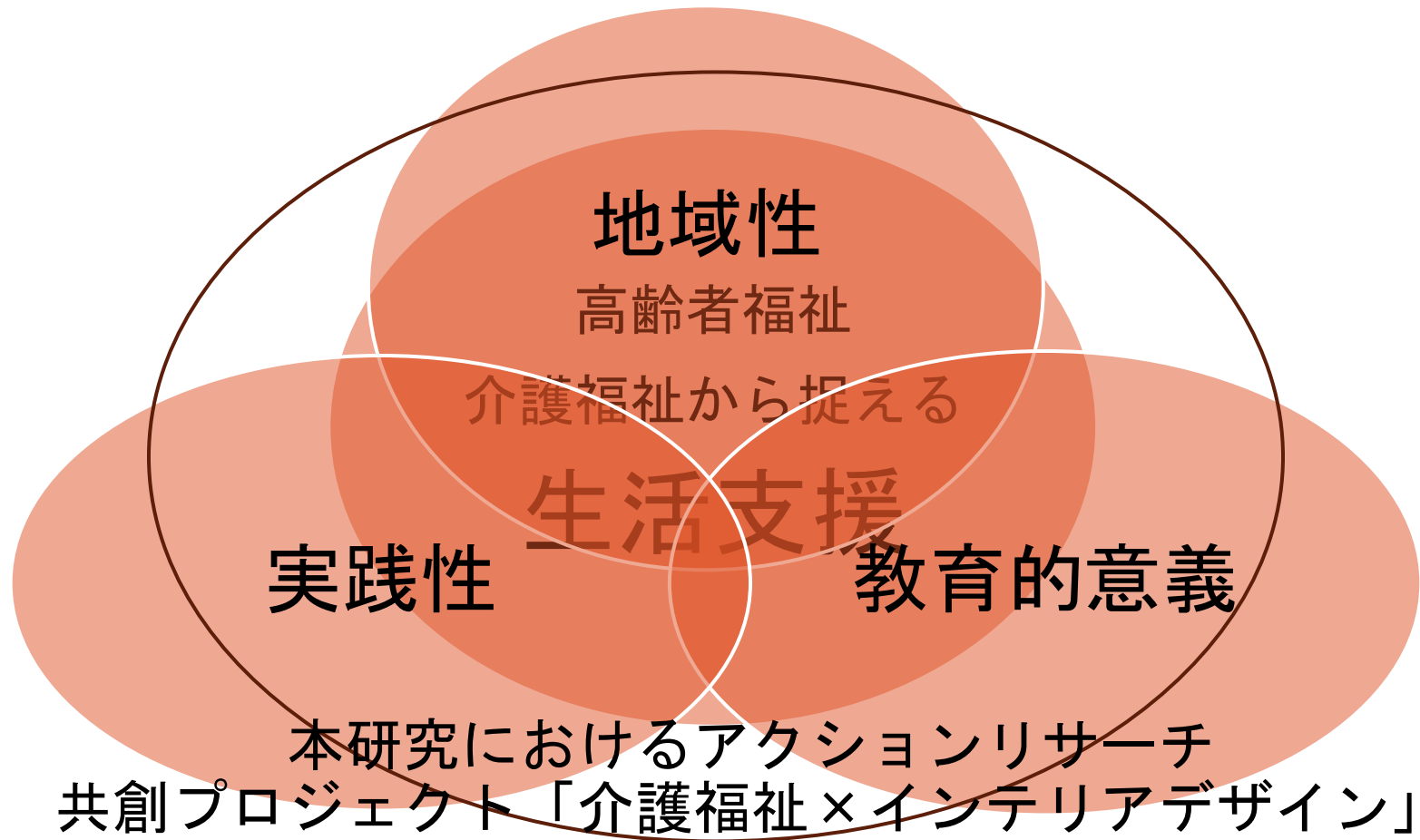


図 高齡者福祉・介護福祉から捉える生活支援と、
地域性、実践性、教育的意義、共創福祉プロジェクトとの関係性



図 見学先の環境をより改善に向けた合宿と大学内での検討会

7. 参考文献

1. 厚生労働省 地域共生社会のポータルサイト
<https://www.mhlw.go.jp/kyouseisyakaiportal/> (2025.11.11) 閲覧
2. Tom Kitwood、『Dementia Reconsidered the person comes first』、Open University Press、1997.
3. 『DCM第8版日本語版』、認知症介護研究・研修大府センター
4. トム・キットウッド著、高橋誠一訳、『認知症のパーソンセンタードケアー新しいケアの文化へ』、筒井書房、2005
5. 水野裕著、『実践パーソン・センタード・ケア』、株式会社ワールドプランニング、2008.
6. 鈴木 みずえ編集、『認知症ケアマッピングを用いたパーソン・センタード・ケア実践報告集』、クオリティケア、2009

ご清聴ありがとうございました。

